

2023 年度
公開シンポジウム報告書

主体的に学ぶ力を伸ばす 探究学習活動に向けて



主催： 東京都立大学 アドミッション・センター 高大連携室

2024 年 3 月 4 日（月）開催

2023 年度 高大連携室公開シンポジウム報告

テーマ

「主体的に学ぶ力を伸ばす探究学習活動に向けて」

2023 年 3 月 4 日（月） 15：00～17：30

会場 東京都立大学南大沢キャンパス 1号館 120 教室 同時リモート配信
(参加申し込み締切り 2月27日(火) Google form にて受付)

参加者数

	高校関係者	都立大教員	都立大職員	高大連携室関係者	その他	合計
対面参加	17	11	2	23	2	55
リモート参加	27	11	6	5	7	56
合計	44	22	8	28	9	111

【開催趣旨】

2022 年度の新学習指導要領改訂に伴う探究学習活動は、高校や中等教育学校など（以下「学校」と総称）各校の状況に応じて様々に展開されています。高大連携室では、学校との協議による探究学習支援活動、個人向け「探究相談ルーム」のほか、本学教員による高校生の指導、OU（オープンユニバーシティ）主催の高校生向け探究相談講座を実施しています。さらに探究学習発表会の場を設けて、学校を超えた生徒の発表や交流の機会を提供しています。このような多様な活動を展開しつつある中で、生徒が主体的に学ぶ力を伸ばす探究学習活動に向けて、大学と学校とが協力して現状を把握し成果と課題を整理することは、今後の探究学習活動を継続する上で、極めて意義のあることとされます。

そこで今回のシンポジウムでは、標記のテーマに関連して、本学の探究学習支援活動のご紹介と、学校現場での探究学習の実践活動のご報告をもとに、生徒が主体的に学ぶ力を伸ばす探究学習活動の推進に向けて成果と課題を話し合うことといたします。

【プログラム】

第一部 大学からの報告（15：00～15：45）

- ①基調講演「生徒が主体的に探究学習に取り組むには何が必要かー私たちの学ぶ力を引き出すものー」

東京都立大学人文社会学部 荒井文昭 教授

- ②総合報告「都立大の探究学習に関わる高大連携活動」

東京都立大学アドミッション・センター 高大連携室 河西奈保子 室長

同上 院生スタッフ代表 舟橋昌哉

第二部 学校からの実践報告（15：55～16：40）

- ①「主体的に学ぶ力を伸ばす探究活動に向けて ハチ北探究実践報告」

東京都立八王子北高等学校 校長 渡邊幸盛 先生

- ②「主体的に学ぶ力を伸ばす探究学習活動に向けて ～「問い」・「振り返り」の観点から～」

東京都立八王子東高等学校 探究部 島津聡 先生

- ③「探究学習活動を核にした主体的・対話的で深い学びに向けて ～神奈川県立相模原高等学校の取り組み～」

神奈川県立相模原高等学校 副校長 木村則夫 先生

第三部 総合討論（16：50～17：30）

講演者及び他2名をパネラーとするパネルディスカッション

第一部 大学からの報告

① 基調講演「生徒が主体的に探究学習に取り組むには何が必要か—私たちの学ぶ力を引き出すもの—」

東京都立大学人文社会学部 荒井文昭 教授

高等学校では、2022年度から「総合的な探究の時間」が必修化された。探求学習にはさまざまな可能性が考えられるが、教員や生徒の多忙といった課題も残されている。探究学習は学習者がやらされているのではなく、“主体的に”取り組むことができるようになることが目的の一つであり、この視点で絶えず見直しを行っていくことが重要である。今回は、この学習者の立場から学ぶ力を引き出すものは何かを考える。

人は自分らしく自由に生きることのできる仕組みとして、民主主義をつくりだした。その中で人は、一人ひとりが生涯学ぶことを、基本的人権として位置づけた。教育を受ける権利、すなわち「探究」などを学習する権利は、各国の憲法などによって、個人の権利として認められている。「探究」は、ただの学習科目の一つではなく、生き方の選択をする際の根源的な学びを構成する重要なものである。私たちの学ぶ力を引き出すものは何かを、本報告では(1)自分との対話、(2)他者との対話、そして(3)生き方の三つを選択できる力の形成として考える。

(1) 自分との対話

探究学習において重要である課題の設定は、学習者から引き出すことが重要になる。大人になっても自身の知識を自分で反すうしながら結びつけて学習のテーマを設定することは難しい。一人ひとりが、真剣に向き合うことができるテーマとめぐりあえるようにするためには、自分との対話が重要である。もっともらしい理由をつけてテーマを自分で選択したとしても、本当に向きあいたいと思えるテーマには、たくさんの試行錯誤の時間を要する。したがって、学習者が自分との対話を繰り返し、自身の「関心」を形成することで、それらを繋げながら発展させていくことが重要である。

(2) 他者との対話

自身の中に「関心」を形成させていくための自分との対話は、他者との対話によって、さらに促される。異なるとらえ方と向き合う関係をつくっていくことは、学ぶ力を引き出すために不可欠な要素である。他者と対話しながら新しいことに取り組むことは、生徒だけではなく、教師にも専門教科を超えた新しい発見になる。一人ひとりの生徒から日々提起される疑問や問いかけに対して、生徒たちとの対話関係を構築していくためにも、教師もこの時代を生きる一人の人間として生徒と真摯に向き合うことが必須になる。教師が一人ひとりと真摯に向き合うことで、生徒たち同士でそれぞれ一人の人間として向きあえるようになることにつながる。自分とは異なる意見をもつ他者であることを、生徒も教師も互いに自覚しあい、相互に対話できる環境をつくっていくことが、探究学習には欠かせな

い。

(3) 生き方

探究学習はすべての教科を通して探究活動を続けることが重要になる。生徒一人ひとりの人格形成と教科ごとに学習した知識を結びつけて我がものとし、自分自身の進路を社会のあり方と結びつけて選択していくことができる力を育てる必要がある。そのために、現実を真剣に生き、その中に問いを発見し、発見した問いを解決していくことを自らの課題として認識するべきである。この認識によって学ぶ力の土台を形成することが、探究学習の基軸である。この学ぶ力が、社会を創造的に持続させていくために重要であり、AIなどでは解決のできない人間固有の価値になる。

探究的な学びは、学習者とともにつくっていくことが重要であり、生徒の問いかけに向き合うことができるように、学校内外での連携協力が求められる。限られた時間と資金のなかで、それをどう実現するかは難しい課題である。しかしながら、一人ひとりの生き方や生活に根ざした問いをていねいに育てあうことのできるように、学ぶ力を生徒から引き出し、学びを保障することができる学校づくりを目指す必要がある。このような学校づくりは、学びの力を生涯にわたって全住民へ保障する社会の仕組みづくりと、連動させる必要がある。

② 総合報告「都立大の探究学習に関わる高大連携活動」

東京都立大学アドミッション・センター 高大連携室 河西奈保子 室長

同上 院生スタッフ代表 舟橋昌哉

舟橋：高大連携室では学内他部門と協力のもと、高校と協議し高校生へ情報提供を行っている。この活動の目標としては、「大学進学を考える高校生の高校生活と進路選択を応援すること」と、「高校生が自ら考え自ら行動する力を身に着ける支援を行うこと」である。提供内容としては専門的なものから一般的なもの、また、少人数に向けて行うものから多人数に向けて行うものまで幅広く行っている。

その中で特に院生スタッフが中心となって行っているものとしては、探究支援、キャンパス見学、個別相談会、大学見学講座が挙げられる。大学見学講座は高校からクラス単位などで大学に来校していただき、模擬講義や大学生活の紹介やキャンパスの紹介を行うものであり、さらに卒業生との交流の場を設ける場合もある。個別相談に関してはオープンキャンパスや大学祭において実施しており、本年度は5年ぶりに日野キャンパスでも実施され、今後も継続していく予定である。キャンパス見学に関しては予約制となっており、自由見学とキャンパスツアーを行っている。現在は南大沢キャンパスのみでしか実施されていないが、今後は日野キャンパスでも実施予定である。

河西：探究学習とは高校生が自分の興味関心を元に課題を設定し、自ら仮説を立て、検証、まとめおよび発表を行うことを通して、受動的な学びから能動的な学びへつなげてもらうこと、進路に関して意識をすることなどを目的としており、2022年度より「総合的な探究

の時間」として必修化された授業であることから現高 1,2 年生が履修している。高校の先生にとっては、生徒ごとに異なるフィードバックが必要である、担当する教科と異なるテーマについて扱う必要がある、教えない指導をするのが難しいという課題がある。高大連携室としては、高校での指導が軌道にのるように積極的に支援を行っており、その背景には高校生が自ら学ぶ力が大切であると考えているということがある。

都立大の探究学習支援としては大きく分けて高校から依頼されているものと大学・都委主催のもの 2 種類に分けられる。大学主催のものとしては主に、教員が高校に出向いて行うガイダンス講演、大学生を高校に派遣して指導を行う高校派遣、高校生が大学に来て教員や学生がそれぞれのテーマについて指導を行う探究ワークショップ、高いレベルで探究活動を行っている生徒に対して大学教員が数カ月にわたって論文指導を行う個別指導、大学・都委主催のものとしては主に、一般向けの講座を探究活動に利用してもらうオープンユニバーシティ講座、高校生が個別に大学生や大学院生と相談をする探究相談ルーム、都教委が主催する特任の先生がゼミを開講して実施する探究ゼミナールが挙げられる。

探究活動支援の中で気を付けている点として、ガイダンス講演は 3 年ほどで高校の自走を促しており、現在はガイダンスだけではなくワークショップとして変化していることが挙げられる。また、高校派遣に関しては高校生と大学生の間には信頼関係がないため、高校の先生と学生の連携が不可欠である点がある。さらに、専門性が出てくる分野に関しては、次年度以降同じような相談があった際に対応できるようにするために、高校の先生にも参加してほしいと考えている。また、発表会の機会の提供も行っている。具体的には、大学見学講座に組み入れて行う中間発表や、文理を問わない幅広い分野を対象として、高校生が成果を発表し、大学の教員がコメントをするという探究学習合同発表会である。オープンユニバーシティでは高校生が探究活動の中で悩みがあった際に相談できる場であり、今年度の開催はかなり小規模であったが生徒 1 人 1 人に対して手厚いサポートを行うことができた。課題としては、レベルが高い生徒に対して十分な発表機会を与える必要があることと、同時に初心者が入りにくくなってしまっていて本当に悩んでいる生徒に対してサポートができていないのではないかとこの点が挙げられる。しかし、参加者からは比較的良好なコメントをいただくことができた。

高大連携室から見る探究学習とその支援の課題として、生徒ごとに進捗状況が揃っていないためタイムリーに適切な指導をすることが難しいこと、生徒ごとにモチベーションが異なること、指導の負担が大きいこと、また、計画を実行に移すためには管理職の先生の役割が重要であるというような課題が挙げられる。また、大学がサポートする場において、探究学習を経験していないことにより、何が大切なのが知らないことが多いこと、人的、時間的なリソースが不足しているということが挙げられる。加えて、大学生の研究と高校生の探究の違いについて大学の教員が完全に理解できていないという問題もある。さらに、多くの企業が社会貢献として行っているサポートが適切であるのか心配になる場合もある。このような状況の中で生徒が主体的に学ぶ力を伸ばすためにはどのようにすればよいのかについて今回の場において意見を得ることができれば良いと考えている。

第二部 学校からの実践報告

①「主体的に学ぶ力を伸ばす探究活動に向けて ハチ北探究実践報告」

東京都立八王子北高等学校 校長 渡邊幸盛 先生

八王子北高校では大きく分けて3つの探究活動に力を入れている。地域探究活動、探究プロジェクト、そして進路探究活動である。

地域探究活動は、一年を通して全員が探究を行う活動である。1学期は現在の社会課題を知った上でテーマ決めを行い、夏休みと2学期を通してフィールドワークを行う。そこで自身で決めたテーマについての情報収集や、課題解決に向けた仮説設定・検証を行い、考察を深めていく。そして3学期に課題解決法のまとめ、発表を行うカリキュラムとなっている。この活動を通して地域の課題を知ること、問題解決能力を高めることが期待される。

探究プロジェクトでは、「服のチカラプロジェクト」、「高校生農業応援プロジェクト」の二つが行われている。服のチカラプロジェクトとは、ファーストリテイリングが行なっているプロジェクトである。小中高生の不要な服を集め、服を必要としている人々に届けるという取り組みであり、これらの活動を通して難民問題やSDGsへの関心の向上を図っている。また、高校生農業応援プロジェクトでは、生きる基本である「食」について理解し、現在の食に関する問題を解決することを目的に「トマトプロジェクト」、「稲作体験プロジェクト」の二つの活動が行われている。トマトプロジェクトでは、地域の農園への訪問やトマトケチャップの商品開発などを通し、我々が口にすることがどのようにして届いているのかを学ぶことができる。開発したケチャップは文化祭や子ども食堂で提供された。稲作体験プロジェクトは、保護者からの提案もあり、地元の小学校と連携し、1年を通し稲作を行ない、さらには「正月飾り」用の「しめ縄」まで実践的に体験することができた。持論ではあるが、「米づくり」は日本の伝統文化そのものであり、主食である「米づくり」を通して、自国の歴史や文化を学ぶことは意義のある教育活動であると考えている。

進路探究プロジェクトでは、プロの世界で生きている人の話を生徒に提供することを目的に、探究講演会を行なっている。過去には刀鍛冶の第一人者である宮入恵氏や、ゲーム開発者であるイム・チョルファン氏の講演が行われた。K-POPブームも手伝い、イム氏の話は生徒に親しみやすく、講演後に海外への関心が高まったという成果が得られた。また、生徒の興味の幅を広げるため芸術鑑賞教室を開く芸能プロジェクトも行っている。

このように、現在は地域の活動を中心に探究活動を行なっている。一方で国際教育の推進も始まっている。今年度、1学年にオンライン英会話、2学年にTGG（東京グローバルゲートウェイ）事業等の英語四技能を向上させる学校行事を実施し、ルーブリック評価での「振り返り」にて、生徒の変容を見取ることができた。最近では、韓国の釜山外国語大

学と国際連携協定を締結した。さらに、ハンガルの第二外国語としての設置や、韓国の釜山外国語大学への短期語学留学を実現し、グローバルな探究活動にも尽力する予定である。

②「主体的に学ぶ力を伸ばす探究学習活動に向けて ～『問い』・『振り返り』の観点から～」
東京都立八王子東高等学校 探究部 島津聡 先生

八王子東高校では、「主体的に学ぶ力」を伸ばすことに重点を置いて探究学習を実践してきた。本校の学びのポリシーは、「自ら学ぶ」「自ら考える」「自ら創る」の3段階で構成され、段階ごとに、1年次に「A探究」「B探究」を、2年次に「C探究」を設置して進めている。本校では探究活動を実施する上で次の3つの論点を設定している。

1つ目の論点は、「問いを立てる」である。本校では、「教科の概念・知識の汎用」と「主体的に取り組む態度」の2点に重点を置いており、探究の目的は探究を通して教科を学ぶことの意味を再定義することにあると考える。そのため、早期から文献リストやマインドマップを活用して生徒の問いを掘り起こし、それらを基にプロットシートを作成することで、生徒自身の問いを学問領域へ繋げる支援に取り組んでいる。そこで重要なのは、教員は生徒に教えるのではなく、生徒に質問しながら突っ込むことで生徒自身が自らの問いを言語化できるようにすることである。

2つ目の論点は、「他教科との接続」である。理科や地歴公民のような実社会と深く結びついた科目は、生徒の教科への認識と実際の探究活動で得た知見のズレは小さいが、数学や国語のような抽象度の高い科目はそのズレが大きくなってしまふことが課題だ。この課題を解決するために、生徒が探究活動を想定して各教科を学べるような工夫を学校として取り組む必要があると考える。

3つ目の論点は、「進路活動との関わり」である。本校は、2年次のC探究を終了後に、各生徒が探究活動で取り組んだ内容についてリフレクションを行う。自己の興味がどこにあるのかを見つめ直すことで、将来の進路選びに役立てている。

本校はこれら3つの論点を踏まえ、探究活動の意義について次のような提案を行いたい。それは、探究の意義は生徒の内在的な素朴な問いを、探究活動を通じて修正・高度化することにあるということだ。つまり、「問いから問いへ」である。本校では、生徒が自身の問いの変化への焦点化と評価を行うことが、生徒の探究的な思考の促進と資質を育成することに繋がると考えている。

③「探究学習活動を核にした主体的・対話的で深い学びに向けて ～神奈川県立相模原高等学校の取り組み～」

神奈川県立相模原高等学校 副校長 木村則夫 先生

神奈川県立相模原高等学校は、「スーパーサイエンスハイスクール(SSH)」に指定され、学校設定科目「SS 課題探究 I・II・III」を設定して段階的な課題研究を行っている。

探究活動の導入として、1年次の5～6月の課題解決活動では、楽しみながら知的好奇心の喚起を図る。1年次の10月にはサイエンスセミナーを行い、課題探究活動と大学の研究のつながり等の講義を通して、課題探究への意欲向上を図った。さらに個人でのテーマ決定後、1年生全員を体育館に集め生徒自身で似たテーマの生徒とグループを組むことで、自分の行いたいテーマを探究できるようにした。探究活動で最も大切なことの一つであるテーマ・グループ決めは、知的好奇心の喚起にもつながると考える。テーマ・グループ決定後、TAや卒業生(大学生)による支援を受けながら仮説の設定を行った。1年次の2月から1年間、試行錯誤の経験を繰り返しながら課題探究活動を行う。理数系人材の育成を主な目的に、昨年度からアドバンストコースを設置し大学や外部機関との連携をとっている。アドバンストコースには、今年度は18グループが所属し、来年度は30グループを超える見込みである。今後は連携・協力していただける大学を増やしていく予定である。

その他の取り組みとして、筑波大学やJAXAなどへのサイエンスツアーや、全5回のサイエンスゼミナールが挙げられる。今年度のサイエンスゼミナールは、全5回のうち3回が本校卒業生による講義であった。卒業生の話は生徒にとっても関心が高く知的好奇心の喚起にもつながりやすいため、今後は卒業生で活躍している方々に協力していただき「県相人材バンク」を作る方針である。

今後の課題としては、課題探究と各教科で身につけた力の融合が挙げられる。探究活動を通して、生徒に粘り強い探究心や多面的なものの見方を身につけてもらうという目的に向け、生徒たちの主体的な学びにつながる問いかけ等の教員の問いかけスキルの向上・生徒同士の質疑応答の活性化の展開を目指している。また、各教科の探究の質向上に向け、「わかりやすい授業」ではなく、先に結論を伝えなぜその結論に至るのか考えさせる「つまずきのある授業」の展開を検討している。これらの課題については現在試行錯誤中であるが、生徒も教員もこの試行錯誤が大切であり、試行錯誤をすることでより良い探究活動が行えると考えている。

第三部 総合討論

初めに、司会の河西室長（高大連携室専任教授）よりパネリスト6名（渡邊校長、島津先生、木村副校長、鍋田様、荒井教授、板倉准教授）の簡単な紹介があった後、今回初参加の鍋田様と板倉先生の自己紹介があった。

その後、第1部での荒井先生の基調講演の要約が伝えられ、まず、荒井先生が基調講演で示された、対話や生徒が自分と向き合う重要性について討論が開始された。

質問1

生徒が自己と向き合う、または対話をするための取り組みとして行っていることは？

渡邊幸盛先生(八王子北高校 校長)

様々な制約がある中での探究活動であるため、なかなか難しい。しかし、その中でも卒業生やその道のプロを呼んでなぜその職業に就いたのかを知ることが大切であり、将来につなげることができる。そのような機会を設けることで生徒は自己と向き合うことができる。

島津聡先生(八王子東高校 探究部)

なぜそのテーマを選んだのか、自分に問いかけるということが大切であることを生徒に伝える。もともと生徒にとって対話することのハードルが高いため、それによってハードルを下げる。

木村則夫先生(相模原高校 副校長)

話し合いや対話が上手くいくようにペーパーチャレンジを取り入れた。遊ぶように楽しみながら競ううちに対話が生まれる。また、課題探究発表会で中間報告を発表する1年生に対し、2年生が自分の経験をもとに様々な話をしてくれた。これを受けて、1年生は来年同じように入ってきた後輩に対して話してくれ、先輩後輩の対話が生まれるであろう。

板倉孝信先生(東京都立大学 大学教育センター 准教授)

校内では探究の成果を含め自分の考えを発信することに対するハードルがあると思う。完璧なものや上手にできたものを発表しなければならないというプレッシャーを感じ、発表することに消極的になる。しかし、完全な完成は存在しないから中間発表くらいの気持ちで発表してみたらどうだろう、と問いかけることで生徒側のハードルが下がり、積極的に発表してくれるようになる。

次に、議題は事前に参加者から募集した話題である、「生徒によって探究活動への意欲に

差があり、指導が難しい。」という議題に移った。初めに、実際高校で探究活動を行った鍋田様から見た感想から議論が進められた。

鍋田翔吾様（東京都立大学理学部生命科学科1年／神奈川県立相模原高校卒業生）

確かに生徒によって探究活動に対しモチベーションに差があった。その理由として、普段の授業では先生が教えてくれ、明確な答えが用意されているが、探究活動には教科書もなく正解もないため戸惑うことが多く、取り掛かりづらい面があった。また、探究活動を行うにしても、アンケートを取るなど簡単な方法に逃げてしまう生徒が何人もいた。先ほど板倉先生が話してくれたように、もし先生が探究活動に完全な完成は存在しないという姿勢を示してくれれば、生徒側もそこまで気負わずに探究活動を行うことができるだろう。

質問2

モチベーションが違う生徒に対してどのように対応しているか？

渡邊先生

失敗してもいいから最後までやり遂げることが大事だと示し、一人一探究を完遂させることを目標としている。また、地域の方や大学など外部の力を借りながらなるべく温度差を埋めるようにしている。

また、この高校に入学したらこんな探究をするんだ、と熱意をもって入学する生徒もいるので、探究活動への意欲は入学前からのアプローチも大事であると感じる。

島津先生

学校というのはどうしても区切りを作らなければならないので、その中でも納得感があるテーマを設定する。そのほか、気付かないところで自分と同じようなテーマの探究を行っている生徒を見つけることでモチベーションになるのではないだろうか。

また、モチベーションの差というのは教師たち大人が望む行動あるいはそれに対する期待が生徒の行動と一致しないことで見えると思うので、モチベーションを低いと見なしてしまう生徒の状態に慎重になり、行動の理由や探究での悩みを聞き取ることも大切と考える。

木村先生

課題設定の段階でサクッと終わってしまう簡単すぎるテーマ設定はよくない。一人一人が1年間粘り強く課題に取り組むのがポイントである。結論を求めないことも大事だ。きれいな結果が出る必要はなく、1年間粘り強く課題に取り組み結果が出なかった場合は次年度の後輩に託すという手段もある。また結果がうまく出なかったとき、どうしてうまくいかなかったのか検証し、新たな仮説を立てるという繰り返しが探究の力をつけてくれる。このようにきれいな結果が出なくても大丈夫と伝えることが、生徒のモチベーションにつながると考えている。

質問 3

今の話を受けて、大学生もモチベーションの差があると思うがどう対応するか？

荒井文昭先生（東京都立大学人文社会学部 教授）

大学生にもわかってほしいのは、自分の発言には価値があるということである。知らないことが恥ずかしく、馬鹿にされる、発言してもしょろがないと感じると思考が止まってしまう。しかし、知らないことには理由があり、なぜ知らないのかをお互い理解しあうと、さらに面白い議論を行うことができる。

続いて、参加していた大学教員から高校生の研究倫理に関して質問があった。

質問 4

「団体の運営をする中、よく高校生よりインタビューの依頼が来る。しかし、プライバシーの侵害に当たるような質問が来ることもあるため、指導をしてほしい。」という質問があった。高校生が外部に連絡を取る際にどのような指導を行っているか？

島津先生

八王子東高校では、探究活動の中で研究倫理の演習を行っている。アンケートを行う生徒もいるが、アンケートには個人情報扱う責任が伴うと指導を行っている。しかし、100人を超える生徒がいるために、先生の審査・指導からすり抜けてしまう生徒もいる。また、ある生徒は、夜間中学校についてアンケート調査を頑張りよい成果を出したものの、発表直前段階で、名前も団体名も公表することができず困惑した。しかしこのような場合でも、探究テーマが社会的な難しさを持った課題であったという学びを得られた。

一方、電話・メールなどで調査を行うことは、個人情報を含んでいる以上慎重に行い、学校側が指導する必要があるが、生徒自身が思い切って初対面の相手に電話・メールをし、相手に真剣にに応じていただけたことが生徒の自信と成長につながることもある。

木村先生

課題探求Ⅰの授業と、情報の授業に交えて行っている。また連絡訪問マニュアルを作成し、電話・メールをする際に使用している。しかし、個人情報の話は情報の授業だけでなく、実際に生徒が依頼をする際改めて伝えるべきである。

荒井先生

裕福な環境で育った生徒が貧困問題について調べたいと考えたとき、立場の違う相手と出会う経験が不足している場合には、指導と助言が必要である。また逆に、困難な環境の中で自身の権利が侵害され続ける経験しかない生徒には、人権についての感覚が育っていない

い場合がある。いずれにしてもこれらの場合には、アンケートで自身が他者の人権を侵害していることに気づけない。「レポートを書くためにアンケートをとりなさい」などという課題を出す場合には、丁寧な助言が必要である。

リモート参加の Q&A から、地域社会や公的機関と生徒の対話に関して質問があった。地域社会と生徒の対話は、人間性を形成する探究の過程で必要であることとして、荒井先生の基調講演でも取り上げられた話題である。

質問 5

地域の人々や探究に携わってきた公的機関、保護者の人々と対話の場を作っていくためのヒントは？

荒井先生

「自分の課題として引き受ける」ということばは、私自身がいつも自分に問い返しているものである。このことばは、私が高校1年生であったときの数学の授業をきっかけに形成された。授業で内積の公式を覚える意味を先生に尋ねたところ、考えるなど言われた。ここに疑問を感じ、自身で調べた結果、昔の数学の教科書には公式のできた経緯が掲載されていたことや、教科書が就職用と大学進学用に分かれてはいなかったことがわかった。そして高校3年生のとき、倫理社会の授業で書いたレポートが「なぜ数学を学ぶのか」だった。このときから現在に至るまで、私は学校の現状を批判的に捉え、生徒のためのものに組みかえようとしてきたつもりである。その過程では、「社会」を批判するだけではなく、その社会を構成している自分自身がその課題を「自分ごととして引き受ける」ことも必要であることに考えがおよんだ。多忙感や生徒にも現場教職員にも広がっているが、探究学習の可能性を広げていくために、今後も私なりにこの課題に向き合っていきたい。

最後に河西室長と、今年度退任する渡邊副室長が、本日のシンポジウムの統括を行った。

河西室長

生徒たちから出る疑問を引き受ける環境ができれば、理想的な探究学習になると考えられる。探究学習は主体的な学びに優れている。高校の先生方には、生徒同士が高めあえるような環境を作っていただきたい。またそれを大学がサポートできる取り組みを行っていききたい。

渡邊恒雄副室長（高大連携室 特任教授）

今回のシンポジウムには 100 名を超えるご参加をいただきありがとうございます。各校様の特徴ある探究学習の実践報告と総合討論を拝聴させていただきました。基調講演の 3 点から振り返りますと、

・ 高校生の探究テーマ選択は、本当に向き合いたいテーマを見つけるという難しい課題です。今回の各校の工夫されたテーマ選択のご報告の活用が期待されます。

・ 友人・指導教員・フィールドワークのほか学校外とのコミュニケーションにより、探究学習の発展が図られました。

・ 探究学習が生徒と教員の学ぶ力を引き出す機会となることは、今後も探究活動の大きな目標として期待されます。

今回の探究学習は、昨年度に続くシンポジウムのテーマでしたが、皆様から内容の濃いご発表とご意見が出されました。企画運営の参加者としてお礼申し上げます。

最後になりますが、3月末に教員スタッフの嶋田と私・渡邊は退任致します。14年間大変にお世話になりました。

報告書発行：2024年3月28日



責任者：東京都立大学アドミッション・センター

高大連携室 室長 河西奈保子

E-mail：koudairg@tmu.ac.jp